

隨感詩集

次韻昭和八年八月一日清水龍山先生與增田
翠竹師參宮有詩却呈請政

后進提撕幾十秋。

老來筆舌贊皇猷。

生平護國扶宗志。

再度參宮神勢州。」

清風明月即知音。

淨几研鑽學博深。

盟友提携拜神廟。

暢來耿々百年心。」

絳帷昕夕無由出。

今日參宮意自平。

鑾水泠々從太古。

淨尽憂時慨世情。」

廟貌巍々繞瑞煙。

山河窈窕鬱蒼然。

祀前肅拜所何讀。

朗々清音立正篇。

清水古梅曰、首々莊重謹嚴、讀者自然斂襟、特道尽余等所
懷殆無餘蘊矣。感々誦々。

隨感詩集

金川荷積



惡業の風は眼に見へねども

鏡にうつる姿恐し。

去年の日は岸邊に二人來しものを

君いまさずばたわむれもなし。

無常とて泣かず歎かず努力せよ

黄昏時に夕顔の咲く。

果てしなき富士川の流を見る度に

久遠のみ親戀しくなりぬ。

見る人も見らるゝ花ももろともに

あわで果つ可き木枯の風。

昨日まで庭木に鳴きしうつ蟬の

あわれ地上に死かばね一つ。

例ひ身は野山に起き伏しするとても

我れにはいます御光りの親。

世は無常我が身もつゆの身なれども

永遠の國のありと思へば。

經文に口はなけれど有りがたや

いつしか宿るみ佛の心

人の世は苦しきものといひながら

佛陀の御慈悲のそよぐ日もあり。

眞夏には恒河の水の枯るゝとも

我れにはつきぬみ佛の水。

風吹けば浪だつものと知りながら

なほ浪恨む心はづかし。



春も過ぎ夏もいぬめり虫の鳴く。

聲なくも人を導く道しるべ。

暑ければ諸はだ脱げよ海邊なら。

八、九、念八、

◆ 日記より (八、七、三)

櫻庭是寶

雨降らず

この農民らの

泣きごえ。

赤い

季を

得る日。

熱あり

へとく／＼に

汗をかく。

このごろ

夢を見る

あとさきもなき夢を。

萬の金より

膽ッ玉を

ほしいと思ふ日。

身延から

懐しの手紙届く

別れ棲みて思出深し。

時折に

御遺文をみる

それもいゝ。

をはりの莓

顔のやう

とり／＼な。

肌にあはぬ

シャツ

いつまで着てる。

夜が明けてゆくなと

寝たまゝ

ちつと感じ。